添牙いろは

絶倫勇者と裸の巫女

ZETSURIN YUSHA TO HADAKA NO MIKO

絶倫勇者と裸の巫女

添牙いろは

ヤツは、満月の夜にだけ姿を現すと聞く。いまは雲により隠れているが、森に入る前は空に丸く美しい輝きを魅せていた。あとは、この暗い木々の中で準備を整えて、ヤツを迎え討てばいい。

闇に紛れて支度を行うのもすっかり慣れたものだ。鞄の中にはよく使うものを三つほど常備している。今宵はどれでいくか、と見繕っていたところ――

「きゃあああああああああ!!」

こんな時間に女の悲鳴だと？　厄介事の予感はあるが、放ってもおけまい。俺は声が聞こえてきた方角に向けて、兎にも角にも走り出す。

そして……ああ、あの女だな。声の主の無事に少しだけ安堵する。決して安堵できる状況ではないが、不幸中の幸い、というやつだ。

何故ならば。

「お願いします！　助けてください！」

腰までありそうな漆黒の髪を闇夜に溶け込ませ、

片手に余る豊満なふたつの乳房を揺らし、

細く括れた腰をくねらせ――

どうやら、付近で強姦にでも遭ったのだろう。この森に潜む野獣と比べれば、人間相手など造作もない。

という期待は、あっさりと覆された。

ベキリ、メキリ、と木々がへし折られていく音。これは……細い枝葉などではない。明らかに、太い幹が砕かれている。間違っても、人の手による所業ではない。

そして、そんなことができる者といえば――

マズイぞ……まだ準備も済ませていないのに。

俺ひとりならともかく、こんな女を連れていては逃げることすらままならない。しかも、敵は既に目視できる距離まで迫っている。

人の三倍はありそうな巨大な図体。

暗闇に鋭く光る禍々しい双眸。

薄汚れた白い毛皮を蝕む呪いのような赤黒い縞。

――グロウタイガー。今回の、俺のターゲットである。

ヤツには際限なく縄張りを広げてゆく習性があった。そこに居座る先客は誰であろうと喰らい殺し、邪魔する相手には容赦がない。前の満月では、人口百名を超える村がひとつ、コイツの手によって廃墟と化した。同業者も五、六名で挑んだようだが、その跡には無残に引き千切られた甲冑の破片だけが残されていたという。このままで

は、俺も彼らと同じ墓標をこの森の中に転がすだけだ。
後先考えず駆けつけてしまったものの、無策で立ち向かったところで俺は普通の戦士と変わらない。その程度で勝てるのなら、あのような莫大な賞金が賭けられることもないだろう。何とかして力を引き出さなくてはならない。
そのためにも、時間を稼ぎたいところだが……既に状況は臨戦態勢に突入してしまっている。とにかく今は、この足手まといをどうにかして逃がすことが先決か。
女を庇うように前に出た俺に、グォンと重たい爪が振り下ろされる。剣を構えて刃を立て、串刺しにして受け止めようとするが――
「グッ……ゥ……！」
お……おい！　こっちはその手を貫いているんだぞ!?　血飛沫を上げながらもその一撃の勢いは止まらず――ヤツの爪が右肩に……ッ！
「ヌ……ッ、ゥ……ガ……ッ！」
ここで柄から手を放そうものなら、完全に勝機を失ってしまう。
「オオオオオ!!」
左手だけは断固として握り締め、蹴りを加えたことで何とか硬い肉の塊から刃を引き抜くことはできた。こちらの得物だけは死守できたものの……もはや右腕に力が入らない。

次の一撃はさすがにマズイぞ……死の淵が垣間見えた瞬間、それを打ち消すような甲高い掛け声が吹き抜ける！

「天を縛る星々の導き！」

振り返ると、先行していたはずの女が、必死に虎に向けて両手を翳している。ぼんやりと光る長い鎖は、魔術か何かで編んだものか。しかし、暴れる大虎の一挙一動によって、光の輝きがほのかに綻びかけている。これは時間の問題だ。

「逃げて下さい！　長くは持ちません！」

だが、その力が尽きたとき、彼女の胸と下腹部は、ヤツの爪によって分断されることになる。それを承知で逃げることなど……できるはずがない！

かろうじて、奥の手を発動させるための条件は揃っている。あとは、僅かな隙があれば……。助けるべき女をも巻き込んでしまっては本末転倒かもしれないが、何事も命には変えられない。後で謝る。だから……許せ！

俺は愛刀を投げ捨てると、生き残った左手をベロリと舐めて、特異体質の唾液を擦り付ける。そして、そのまま……

「お願いですから早く逃げ……えっ!?　ナニを……!?」

俺のズボンから抜き出された益荒男の宝刀を目の当たりにして、目を白黒させている。それで集中力を乱したのか、虎に掛けられた束縛の魔術が解けてしまった。

「グォオンッ!?」
突然自由になった反動で、四肢のバランスを崩す虎の化物。だが、すぐにでも体勢を直して襲いかかってくることだろう。もう、幾許の猶予もない。
「スマン……ッ！」
俺は己の剣を振り回しながら、こちらの下半身に釘付けになっている女に肩から体当たりをブチかます！
「きゃあっ!?」
尻餅を撞く女の両足を血塗れの右手と唾液でヌルつく左手で引っ掴んで……強引に！
「こんなときにナニを考えて――」
こんなとき……だからなんだよ……ッ！

――過剰開放（リリース・オーバー）――!!

それは、虎の呻きを掻き消す嬌声。
「あっ……やぁぁぁ……っ!?」
男の剣が女の鞘に収まることで、俺の中で眠っていた力が無理やり引き起こされて

いく……ッ！

このとき既に、縄張り内の異物を排除しようとグロウタイガーは重なり合った俺たちに爪を向けていた。

しかし……

ゴキンッ！

……つぅ、この重圧はさすが、といったところか。拳を振り上げ弾き返したものの……これは、普通の人間には荷が重い。だが、あまり無茶はさせないでくれ。その一発は、繋がった女の身体にも伝わっちまう。

「はぐぅっ!?　は……はぁん……❤」

悲鳴を上げながらも痛みはないようだ。ならば、すぐさま体勢を立て直そう。ここまで来れば、人ひとりの重さなど綿毛に等しい。女を抱えながら、俺は草に紛れていた剣の柄を改めて握り直した。右腕の傷は完全に塞がっており、自由に動かせるどころか、むしろ力が湧いてくる。内なる波動は握りを通じて刃まで到達し、こうして軽く振り抜いただけで――

ザザ……ザザザ……ッ

空気ごと切り裂いて、木々の幹を一直線に分断してやった。そして巨木は、虎に向けて一斉に倒壊してゆく！

「ガッ……ゴァァァ……!?」

予期せぬ攻撃に少しだけ怯むタイガーだったが、やはりこの程度では足止めにもならないらしい。鬱陶しげに障害物を払い除け、こちらに敵意を向けてくる。やはり、この場で決着をつけねばならないか。

奥の手（リリース・オーバー）は活動時間が著しく限定されている。その中でも、この女は、非常に厄介だ。何しろ――

「ふぁっ……あぁっ……いいぃぃ……っ❤」

コイツ……なんて締め付けしてやがる……！　こちらに揺られて上下する度、根本から先まで……まるで吸い付いてくるようだ……ッ！

「凄い……凄いです……っ、ふぁぁぁ……！」

この女は……紛れもない名器の持ち主！　できれば、こんな形で出会いたくなかった。膣内（ナカ）だけでなく、その胸も、腕も、快楽に喘ぐ鳴き声に至るまで、すべてがオスを刺激する。

そのおかげか、ここまで力を引き出されたことなど初めてだ。これなら、ヤツの間合いの外から剣気だけで圧倒できる。俺は素振りの訓練の如く、空を切り裂いていくだけ。それが、虎の身体から次々と鮮血を噴き上がらせる！

「グッ……グァ……ガゴォォォォ!!」

これだけ手傷を負わせているのに……何てヤツだ。致命打を与えない限り、引く気はないらしい。グズグズしていてはこちらが限界を超えてしまう。力の代償は、この女だ。

「いいのぉ……おちんぽ素敵ぃぃぃ……っ！」

こちらの気も知らずに、女は暢気に官能を食っている。余程気持ちいいのか、膣内（ナカ）の締め付けも凄まじい。揺れる彼女の身体に合わせて俺の理性が徐々に削ぎ落とされていく。

「う……そろそろ……時間切れ……か!?」

次の一撃でキメなければ……！　俺の決死の覚悟の前で、腹にぶら下がっている女は呑気に腰を悶えさせている。

「もう少し……あはぁ……もう少しだけぇ……❤❤❤」

言われずとも、もう少ししかない。前掛けのように女を抱えている以上、近接戦闘は避けたかったが……やむを得ん！　だが、飛び込むからには一撃で仕留める！

大地を蹴り、肩を捻り、心臓部を目掛けて最短距離で――貫くッ！

「グワォォォォォォォォ!!」

俺の獲物がグロウタイガーの胸に深々と突き刺さった。その衝撃は腰に、そして下腹部にも伝わり、もう一本の剣を通して彼女の子宮深くに響き渡る。

「ふぁっ……あっ……もう少しなのにぃぃぃぃ❤❤❤」

彼女の四肢が、そして膣内が、俺の全身を締め付けてきた。揺れる彼女によってゾルゾルと先端の傘を抉られては……もう……！

ビュルッ！　ビュクルッ！　ビュルッ！　ビュルルッ!!

「か……は……っ!?」

射精けていく……俺の精液が……。

それまで押さえ込んでいた右腕の傷口も元通りに開き、射精のように血飛沫が噴き出す。

こんな腕ではヤツの胸部から剣を引き抜くこともできない。抜け殻となった俺は女と共に土の地面へと吸い込まれていく……。

「うぐっ」

「きゃんっ」

女を支えるどころか受け身すら取れずに、俺は短い草の上へ無様に転がされた。女から抜け落ちても、未だビュルビュルと射精（なが）れ続けている。出血も酷い。俺の身体からは紅と白の生命力がドクドクと流れ出している。

それと同時にズゥウン……という激しい地鳴りを響かせながら、グロウタイガーもまた大の字になって倒れたようだ。

俺の手には、ヤツと戦うための武器がない。

あったとしても、指一本動かすことができない。

これでヤツが起き上がるようなことがあれば――

「グル……グルル……」

倒したはずの大虎は、唸り声を上げながら身を起こそうとしている。俺の最期の一撃を胸から生やしたままで。

もはや、これまで……か。過剰開放（リリース・オーバー）は俺にとって緊急時の最終手段である。それが通じなかったのだから……これより先は、ない。

翳っていた満月も、ようやくその姿を取り戻したようだ。最期に俺を屠る敵の姿を見ておこうと、俺は何とか頭をもたげようとする。

しかし、俺が目を奪われたのは、巨大な虎の方ではなかった。

「ありがとうございました。もう大丈夫ですよ」

その眩さを、俺は直視することができない。俺たちの種族はその性質上、通常の人間より夜目が利く。そこに、まるで篝火でも焚いたような光が差し込んできたのだ。まともに目など開けていられない。

細めた目蓋の隙間から懸命に覗き込むと、そこにあるのは、女のようだ。俺と虎の間に立ちはだかり、金色に煌めく長い髪をなびかせて。両手両足、そして、その丸く実った尻まですべてを晒す女の全身は、夜の森の中に浮かぶ灯火のようだ。

このような光に包まれてはよく見えないが、声は初めて聞くものではない。俺の胸にしがみついて、あられもなく上げられていた嬌声と、記憶の中で一致する。お前はあの……黒髪の女なのか……？

彼女は右手を虎へと掲げ、穏やかな声色で別れを告げる。

「塵に還れ（エクスティンクション）……」

虎の身体が少女と同じ光に包まれた次の瞬間、蛍が散り散りになるようにポン、と弾けた。宙には俺の愛刀だけが残され、台座を失った刃はトスンと地面に突き刺さる。

何なんだ、この魔術は……？　こんな力があるのなら最初から――と言いたくなったが、彼女はしきりに『もう少し』と喘いでいた。詳しい話をしている暇はなかった

が、こういうことなら戦い方も違っただろう。
何より、惜しまれるのは――
「首級（クビ）まで消しちまいやがって……」
証拠を持ち帰らねばギルドで換金することができない。最期の仕事が無報酬、というのも……ハンターとして悔やまれる。せめて共闘した彼女だけでも、賞金を受け取ってもらいたかった。
が……いまとなってはどうにもならない。俺の死によって、〈絶倫族〉の歴史の幕は閉じる。散々人々に迷惑を掛け続けてきたが、人ひとり救えて死ねるなら……悪くない……か。
遠のく意識の中で、静かに詫びる。俺の一族がしでかしたことを。
そして、この女に礼のひとつも伝えられなかったことを。

絶倫勇者と裸の巫女

添牙いろは

Twitter: http://twitter.com/soekiba
Pixiv: http://pixiv.me/soekiba

発行

2020/04/02　Ver.1.0.0

表紙デザイン

RIRI / RIRI Design Works(@riridesignworks)
http://riridesignworks.wix.com/dojin

空色書房

http://soekiba.net/

無断での転載・複写・転用
Web サイトへのアップロードは
法律で禁止されております。

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで
http://soekiba.net/tatsuma/

空色書房
Sleeping under the sky

イジメの起きない
イジメ小説!?

いじめられっ子の処方箋
正義の投与の行く末は

イジメ撲滅運動——
とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊(まいたけ ひなぎく)は意図せず巻き込まれていく。
しかし……
そもそも、イジメとは何なのか？
そんな疑問に突き当たる。
悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？
そして、運動を取り仕切る
学級委員・雨弓来禾(あまゆみ らいか)の真の目的とは……？
イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

コミカライズ版 総集編全３巻
各配信サイト様より
好評配信中

詳しくはWebで
http://soekiba.net/presc/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

未知なる世界で
どう生き延びる…？

それが彼女の
soregа kanojo no
生存戦略！
seizon senryaku

オトナ向けな
番外編的短編集
『それが彼女の
性交戦略！』も
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが逞しく生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして……
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか……!?

詳しくはWebで
http://soekiba.net/4girls/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

アストラルツインズ
兄は指揮官に妹は銃殺刑に

迫り来る反逆者（テロリスト）
担がれる民間人（プリンセス）
そして…
掻き乱す問題児（アホの子）!

アストラルツインズ2
兄は国を憂い主女は国を滅ぼす

つらアストラ!?
妹はお風呂嫌いで
主女は珈琲竹お好き
アストラルツインズ
後日談的R-18短編集!

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

詳しくはWebで
http://soekiba.net/astra/

空色書房
Sleeping under the sky

地下深くに隔離されたその研究所に携わる者は
例外なく去勢されている……はずだった。
しかし、密かに施術を逃れていたその男は
性の概念を忘れた女たちの性を目覚めさせ
快楽によって支配していく。

欲望のままに己を貫き通す天才科学者の
卑猥な人体実験の目指す先は……？

ここは子づくり実験室

詳しくはWebで
http://soekiba.net/dystopia/011/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

セイムアズラビット

うさぎさんといっしょ

ついに訪れた
家族の離散――
生きる道を失い
故郷である兎ヶ島へと
帰ってきた里倉和兎。
しかし、そこは――
老若男女問わず誰もが発情し、
異性を求める色情の地と化していた！
裸の女の子たちに迫られて、
最初は戸惑う和兎だったが、
次第に住民たちの勢いに
流されてゆく。
しかし――

食べて
寝て
交尾する！

詳しくはWebで
http://soekiba.net/sar/

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで
http://soekiba.net/rev/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

露出少女と痴女の
モラルなき戦い！

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる
露出少女・埋竹礼菜
大好きな男と子供を成すことに
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。
そんな二人に翻弄され続ける
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル！

詳しくはWebで
http://soekiba.net/ninja/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

僕と私の露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背徳的性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に育った露出癖

わたしとあなたの露出交換日記

野外で裸に
なりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。
出逢ってはならない二人が
出逢ってしまい――

スピンオフでも
野外で全裸！

詳しくはWebで
http://soekiba.net/outdoor/

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで
http://soekiba.net/dystopia/

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで

http://soekiba.net/lossmem/

空色書房
Sleeping under the sky

詳しくはWebで

http://soekiba.net/game/

＜絶倫族＞――女と相対すると見境なく犯してしまう凶悪な民族。
＜月の巫女＞――男を誘惑し、際限なく精を搾取する神の下僕。

出会ってはならないふたりが、出会ってしまった……!?

空色書房
Shouting under the sky